



國文

◎若葉 (即題)

文科一部二年 横井滿幾野

木は彌生の頃紅に白に色めづらかに花咲きたるがよし秋の梢の紅葉したるが龍田姫の衣どまがふもよしまた寒けき空にむらがりたる枯枝のさまも趣多しされど初夏の項紅の花は散りすぎて山吹あやめの黄に紫に匂ふ、山に野に都に鄙に淺みごりの若葉やはらかき色に萌え出でたるながめにしくものぞなき
あした早く外にいでて見れば濕を帯び來れる風何となく吹きかよひて土も石も草の葉もうるほひたるに楓などのわかみごりたわたと萌えた

るより露したたるさま文にも晝にも得かくまじどぞおぼゆる
稍かろくなれる袂の着こちよきにいでたち輕々山に野に遊ばんか眼に見ゆるかざり淺黄に綠に若葉ならぬはなし。ふみゆく野路はやはらかきしとねの如く差し交ふ枝は青き蓋を綴れるが如し。さす日の光も淡きみごりの色にうつろひて我が顔も青く衣も青く眠らばわが夢また青かるべくわが心にも青き光の透るかど疑はる。
一雨さどふりをそぎたる後夕日の光梢に映えたるに露をふくめるみごり葉の一きはつやつやしう輝き渡れる更にいはいはんかたもなくめでたし。

短歌

をりにふれて

柴舟

かゝる思してある人は一人ぞと涙催す 大空の下
思ふまゝわが手わが足のばさまし生けるしものありもあらずも
病み疲れといふほどにもあらねども心茫たり何をしてみました
闇にをればあらしと思ふ化物の顔のみゆるもわが若さゆゑ
あゝしばらく野を見ぬ心いと淋し黄ばめる麥のふしてあるらむ
よごれたる服もいたまし町の塵雲のやうなる中を來たれば
夏の來て青き力の漲れる中にこのわれあるにおごろく
あえかなるしらべに乗りて出でし歌をさなき時はすべてなつかし
薄霧に紅き火うるむ東京をしはし離るゝ今日のこゝろよ (新橋にて)
夏たけて緑もくろくなりけり歌なかるべし野にはゆくとも